

北欧の文書館

水野 保

1 はじめに

平成4年10月17日からの2週間、北欧4ヵ国の文書館を視察する機会に恵まれた。メンバーは5人で、国立史料館の安藤正人氏、東京修復保存センターの坂本勇氏、東京都公文書館の水口政次氏、国際協力事業団図書館の上原樹代氏、それに私。そもそもこの視察は「スカンジナビア各国歴史史料保存利用機関における歴史史料保存専門職に関する研究」と題する共同研究を安藤・坂本・水口の3氏がスカンジナビア・ニッポン・ササカワ財団に申請し、認められた事が発端となっている。上記3名に、協力者の形で上原・水野の2名が加わった。研究テーマにもあるように、北欧4ヵ国の中で文書館専門職がどのように位置づけられ、どのような仕事をしているのかを実見してくる事が、今回の仕事となった。

文書館制度を調べるには文書館に向かう事が必要だが、それだけでは不十分だろう。日本を含めた世界の国々は、互いに影響を受けながらもそれぞれが独自の経過を踏まえて諸々の制度を作り上げている。ことを行政制度に限っても同じ事がいえる。文書館制度と一口にいても、その国が作り上げた諸制度の中で文書館が担っている分野を理解しないと、正確な把握は難しい。今回の視察の中で、公立の文書館制度を一つ上位の行政制度の中から理解しようとした努力は、今後につながる視点となるのではないかと思う。

今回視察した北欧4ヵ国の施設のうち、事前のコンタクトをとって正式訪問をした所は、各国の国立中央文書館4館、デンマーク国内の国立広域文書館3館・国立企業文書館1館・王立修復学校1校・王立図書館1館2部門で、これらを訪問順に記すと次のようにな

る。

【デンマーク】

- ①ユトランド南部広域文書館（所在市はオーペンロー／以下同）
- ②デンマーク企業文書館（オーフス）
- ③ユトランド北部広域文書館（ビボー）
- ④デンマーク国立文書館（コペンハーゲン）
- ⑤シェラン島広域文書館（コペンハーゲン）
- ⑥王立修復学校（コペンハーゲン）
- ⑦王立図書館修復部門（コペンハーゲン）
- ⑧王立図書館閲覧・保存部門（コペンハーゲン）

【フィンランド】

- ⑨国立文書館（ヘルシンキ）

【スウェーデン】

- ⑩国立文書館（ストックホルム）

【ノルウェー】

- ⑪国立文書館（オスロ）

コンタクトはとらず、一利用者として訪ねた美術館、図書館、博物館、資料館も数多くあり、楽しくもあったがかなりハードな旅でもあった。

今回の視察に関しては、報告書の出版を計画しているので、詳細はそちらに譲りたい。本稿では我々5人が実際に見聞して、新鮮なショックを受けた事柄を中心に記してみた。日本とは異なる制度が多々見られたが参考になるものも多く、私個人としては印象深い旅となった。

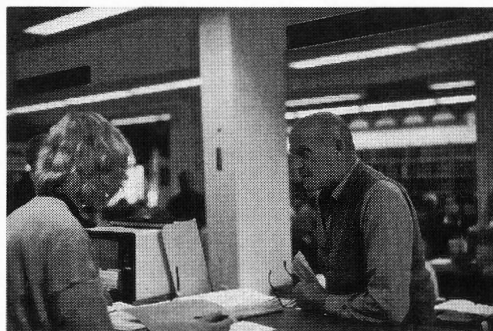
2 北欧4ヵ国の文書館概要

それぞれの国には、文書館制度の基盤となる文書館法があり、文書館の存在と歴史的資料の価値、利用の権利が意義づけられている。そして文書館運営の両輪であるアーキビストとコンサーバーが、二大専門職として位置

づけられている。このことは個々の文書館に出掛けた際に、強く印象づけられた。どこの文書館でもアーキビストの仕事室が充実していたが、同時にコンサベーターの仕事室も素晴らしいものであった。さて、以下北欧4ヵ国の文書館視察で感じた事を記してみるが、個人的に興味深かった次のテーマごとに記していく。広域文書館制度、教区文書とジニオロジスト、修復学校、旧ソ連からの引き揚げ希望者、地下の書庫。

(1) 広域文書館制度

デンマークの例でいうと、中央政府の公文書を扱う文書館の他に、四つの広域文書館があり、それぞれの地域の自治体、教会、民間団体の文書を収集している。日本では、東京都が神奈川県公文書を収集する事はないが、こちらの「広域」とは、例えて言えば関東地区文書館といったようなもので、それも国立の施設である。北欧では既に100年の歴史があるこの「広域文書館制度」、一つの行政区域を越えたこの発想は、日本でも手本にして良い制度だと思う。複合館問題などの解決策の一つとして、また、単一自治体内で文書館設置が難しい場合の代替措置として考えてみるのも良いのではないかな。一つの行政区域の中だけで解決しようとするから、本来ありえない異種合同建物を造り、無理をしてしまう。同一県内の文書館と博物館を合築するより、多県にまたがる広域文書館の方が合理的な運営が出来るのではないかな。今の日本の現状から行政域を越える事が困難ならば、例えば、国の出先機関の文書館を考える際に、広域的な地区割りを施したシステムを考えられないかな。いま問題になっている司法資料の散逸に関しても、もし各地裁ごとに文書館が出来ないのならば、日本の中をいくつかの広域ブロックにして、そのブロック内に存在するいくつかの裁判所の文書を収集すれば良い。広域文書館の発想は、日本でも応用出来そうな気がする。

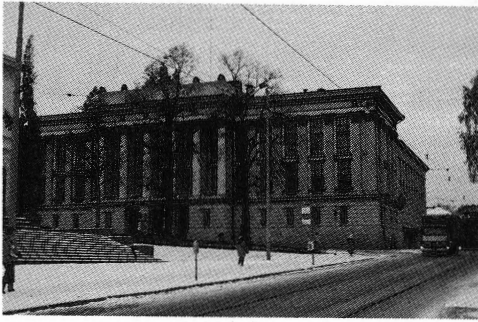


ビボー（デンマーク）の広域文書館で

(2) 教区文書とジニオロジスト

彼の国々では、出生届は教会に届け出るが、いわば戸籍文書にあたるこれらの教区文書は、年月を経て文書館に引き継がれ公開される。ルーツ調べをするジニオロジストの存在は、過去に出掛けた欧州の文書館でも見かけ興味をもっていたが、これは教区文書の存在と密接不可分の関係にある。北欧の文書館でも、利用者の大半はジニオロジストで占められていた。シェラン島広域文書館を訪問した時にも、アーキビストの方がジニオロジストについて話してくれたが、利用者の90%が彼らによる家系調査だという。どうして外国ではこんなにもルーツ探しが多いのだろう。歴史研究者の利用に較べてはるかに多い。文書館利用者全体に占めるジニオロジストの数に関して、訪れた各館での実態をまとめておく。デンマーク国立文書館90%、南ユトランド広域文書館80%、北ユトランド広域文書館75%、シェラン島広域文書館90%。

ジニオロジストの利用はプライバシー概念の問題を含むが、同館の書庫見学で説明を受けた警察記録の扱いに興味をおぼえた。80年後に公開されるのだが、犯罪者の顔写真もOKで、売春婦の顔写真も公開されていた。アーキビスト氏は、警察記録は社会史の上で重要な記録だからだと話していたが、その意見はもっともなものだ。このような公開理論を日本に伝える場合は、どのような言い方をすれば真意が伝わるだろうか。その国の社会が作



フィンランド国立文書館

り上げた諸制度や考え方を知らないと、目の前にした文書館制度が担っている所掌範囲の正確な把握は難しいものだと思う。

(3) 修復学校

コペンハーゲンにあるデンマーク王立修復学校へ出掛けた。この学校は3学科からなり、生徒数は約90人。デンマーク国内では、唯一のコンサーバー養成学校である。校長先生のご案内で学校の中を見せていただく。修復部門の教室へ入る。大きな部屋に沢山のリーフキャストマシンが並んでいる。机には、プラスチック製の真空空間を作る装置も付いている。撮影室には、通常の撮影機の他にX線撮影機があった。考古資料の修復をする専用教室もある。絵画教室では10人程の生徒が授業を受けていたが、壁には同一のマリア像を撮った普通写真とX線フィルム写真が飾られていた。素材分析を行う部屋では、学生が木片を顕微鏡で覗いている。どの部屋にも化学薬品が多い。写真教室では、肉眼では見えなくなってしまった写真の復元作業について話していただき、いくつかの実例を見せてもらった。生徒は皆若い人達だ。10代~20代のこのような人達が、保存や修復の仕事を引き継いでいる。うらやましいと思う。今後ますます多様化するであろう素材を考えれば、我国にもこのような教育体制が求められるはずだ。過去の時代の資料より20世紀のものの方が残らないのでは、同時代に生きた者として恥ずかしいではないか。アーキビストと同

時にコンサーバーの養成が急務だ。

(4) 旧ソ連からの引き揚げ希望者

ヘルシンキの中心部にあるフィンランド国立文書館を訪問する。館内見学の後、昼食となった。食事をしながら職員の方々と歓談。旧体制崩壊後のソ連からの利用者が多いという。その人達はもともとフィンランドからソ連へ移住した人達だそうだが、フィンランド籍の証明が取れば、ソ連を出国しフィンランドに戻る事が出来るのだそうだ。国家が動揺するという事は、個々の人民にとっては大変な事だという事が判る。ソ連の経済システムは、社会主義体制という土台の上で成り立っていた。土台が崩れた事によるシステムの崩壊は察するに余りある。どうも今までの報道は、例えそれが改革の主眼ではあったにせよ、政治的・民族的な次元に片寄り過ぎていたのではないかと思う。状況を大きな歴史の流れの中で捉える事は必要だが、それだけではその場に居合わせた個々人の気持ちは掴めないだろう。民主化を生きる糧に出来ない人の存在もまた事実なのだ。人が生きていく上には制度規範が必要とはいえ、個人が国家や制度の下で翻弄される姿は、歴史の中で常に繰り返される。これらの帰国者が、自己の行動を記憶にとどめる事無く記録化してくれる事を、切に願いたい。枝葉があればこそ、幹は栄えるのだから。ソ連国内には大きな混乱と先行き不安があるのだろう。それにしても資料保存施設は、時には人の一生をも左右させるだけの力を持っているのだ。そんな事は、日本では考えた事もなかった。この様な事実を知っただけでも、フィンランドに来た甲斐があった。さらっと言うてのける彼らだが、重いものが心に残る。

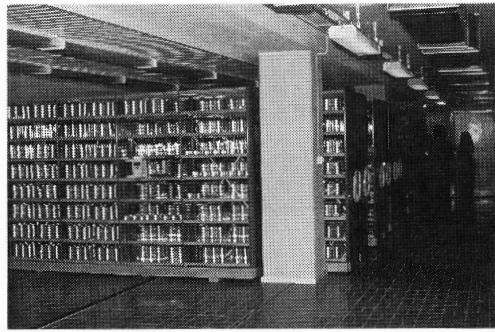
(5) 地下の書庫

スウェーデンとノルウェーの国立文書館は、どちらも地下十数メートルの岩盤層内に書庫を持っていた。エレベーターで地下に降り鉄の扉を抜けて書庫へ入るのだが、壁の厚さは

1メートルもあった。この書庫は、たとえ核戦争が起こっても資料を失う事のないように設計されているのだそうだ。この国の思想の根底には、仮に人類が生存し得ない状況が発生したとしても、資料だけは未来に残そうとする強い意思があるような気がしてならない。人類はあと何千年生存するのか判らないが、仮に人類が死滅してもこの書庫は未来に残せそうな気がする。遠い未来に地球に到着した宇宙人は、スウェーデンとノルウェーの文献を目にするのかもしれない。両国の文化が地球に生存した生き物の文化として、他の惑星に伝えられて行くのではないだろうか。考えただけでも楽しくなる。書庫一つの事なのに、何だか壮大な気分になってしまった。それにしても両国の文書館からは、保存に対する考え方の一つの回答を見せ付けられたような気がした。良い経験だった。

3 まとめ

今回の旅は、考えさせられる事の多かった旅でもあった。文書館制度も国によっていろいろな応用形のある事を知った事は、大きな収穫となった。資料を保存し利用していくという根本精神を守りながら、発展の過程でその国その地域の文化や制度に見合った形に適応変化していったのだろう。文書館制度というより行政制度の違いと考える事も出来る。公立文書館は行政組織の一部と考えれば、おおもとの特徴はそのまま文書館の特徴ともなる。広域文書館制度は、特におもしろい考え方だと思う。保存に対する考え方は、それ以上に刺激的だった。コンサベーターの養成に関しては、デンマークのやり方に興味が持てた。あのように多くの若い人達が技術を継いでいく様は、明日に希望が持てた。日本にも科学的教育に基づいた保存理論を教える学校が必要だと思う。その多くを民間に任せてしまう日本のやり方は、資本主義制度の競争原理が優先する限り、有効な技法が会社存続のために利用され、公開されにくい。技術の普遍化が妨げられてしまう。公設のこの様な養



スウェーデン国立文書館の地下書庫
(マイクロフィルム収蔵室)

成制度と、技術水準の向上を目指す公開システムが必要だろう。保存に関してはもう一つ、岩盤内の書庫にも新鮮な驚きを覚えた。保存思想の違いの一端を示されたように感じた。この思想は「たまたま運良く残ったものを有り難がる」といったような消極的なものではなく、「自分の力で未来に残す」といった強い意志の表れのように感じられた。そしてこの考え方こそ文書館制度の本旨を突いているように思う。それにもう一つ、ジニオロジストの存在ももっと考えてみたい。数としての彼らを考えた場合には、利用者全体の8~9割を占めている。スカンジナビア諸国からジニオロジストをなくしてしまったら、文書館の存在価値は社会的認知を留めうるだろうか。逆に考えれば、日本でも戸籍簿の利用が広範に認められれば、利用者の数が数倍に増えるのだろうか。プライバシーに対する考え方も異なるので、一概にそうとも思えないが、果たしてどうだろう。また、ジニオロジストをその利用目的からとらえたら、何故この様に大量の利用者が存在するのだろうか。つまり彼らは何の目的で自分の過去を調べているのだろうか。単なる知的欲求だけとは、信じ難い。社会的認知や評価とつながるような制度があるのだろうか。社会の仕組みから考えていかないと理解出来ないような気がする。

いずれにしても、日本にとってはどのような考え方とシステムが必要なのかの、一つの手本を見せられたような気がした。

みずの たもつ・東京都公文書館